

横浜市 歴史博物館 NEWS 12 2001・3

- ◆いんたびゅー／岡村道雄「縄文時代は自然の恵みを効率よく取り入れ、豊かに暮らしていた」
- ◆大塚・歳勝土遺跡公園開園5周年記念特別展「甦る環濠集落」によせて
- ◆＜研究余話＞東海道と横浜地域の宿場―神奈川・保土ヶ谷・戸塚―
- ◆収集・収蔵資料の紹介 [13] 養蚕図屏風
- ◆＜常設展示室探検＞桜屋
- ◆＜博物館ウラばなし＞情報機器室
- ◆ちよいとミュージアムショップたいむ
- ◆＜知ってますか？＞インターネットホームページ



縄文時代は自然の恵みを効率よく 取り入れ、豊かに暮らしていた

◎考古学に興味を持ったきっかけは。

小学校三年生の時、同級生に「山に行くと面白いものが拾えるから」と誘われ、裏山に行くと石器や土器を拾いました。そこは遺跡だったのです。それが面白くなって、放課後や学校が休みの日に、一人で山に通うようになりました。学校があまり好きでなく、そのころは内気だったせいもあるでしょう、そこにいることが大好きになりました。自然と一体になった遺跡にいただけで、自分の世界が築けて、時間のたつのを忘れました。

「この下にいろいろな生活が埋もれているのだな」と思ったり、そうしていると大昔の人と交信できるような気がしました。その山は私にとって心の安らぐ場所でした。それから、本屋で本を探して土器のことを学んだりするうち、考古学的なものに目ざめてきました。高校では初め、何となく理科系を勉強していましたが、何か理科系はしっくりこないと感じた時、「そうだ、おれには考古学があるんだ」と気づいて進路を変えました。

日本文化の基礎を形成

◎昨年十一月に当館で「縄文時代の集落



と人々の暮らし」と題して講演されましたが、縄文時代とはどういう時代でしょうか。

日本の自然環境、日本の風土によく合うように工夫した生活様式を築いた時代、ではないですか。自然物を効率よく使う、つまり食べ物としても道具としても、あますところなく使つてリサイクルしながら、自然と一体になった生活をしていたと思います。かといって自然の中でひっそりと住んでいたのではなく、自然を適度に変えて、自然を取り込んで、自然をそれほどいじめない、という上手なつき合い方をしていました。そういう生活様式や自然に対する考え方が日本の文化の背景にあることから見れば、日本文化の基礎を形成した時代だといえます。

◎縄文時代は豊かだったといえますか。

豊かだったでしょう。必要以上に求めているないし、あるものを上手に、効率よく使っていたのですから、その意味で非常に安定していました。だからこそ一万年もの間、同じスタイル、同じ枠組みで生活を維持していったのではないかと思います。

遺跡で思い思いのことを

◎遺跡の保存・活用についての考えを聞かせてください。

横浜市歴史博物館の遺跡公園を見て感じたことは、地域の人たちに本当に親しまれているということです。あそこに、いろいろな目的で、たくさんの人が集まっておられるということは、大変よいことだと思えます。遺跡というのは、そこに行つて勉強する場所と限るのではなく、そこでそれぞれ思い思いのことをして、その中に、大昔のことに思いをはせたり、歴史の学習の糸口をつかむこともある、という場所であつていいと思うのです。そういう空間として作られ、利用されているという意味で、この遺跡公園は評価できます。

分かりやすく身近な素材で

◎今後の博物館に期待することは。

博物館にとって重要なことは、分かりやすいことと、素材が身近であることだと思います。その意味で日本の博物館はうまくいっているといえます。外国の博物館では、学習の場に限らない空間づ

くりができていと感じます。そこで遊んだり、また学校教育の一環として子どもたちが来ても、一つの展示ケースの前に座らせて、自由に意見を言わせたりします。ズラズラと並べられたものを、ただ見て回るような展示ではないもの、もっと分かりやすい素材や情報を提供するべきでしょう。分かりやすい種類のものを、分かりやすく語ることにより、来館者が身近な事柄から理解を深めていくようなもの。ちょっと一段下がったレベルの基本的な部分で、参加しながら学べるようなものを、提供していくことが必要でしょう。その意味で最近、体を動かすことで何か具体的な事柄が分かる、という体験型の博物館が増えているのはよいことです。

◎最近、考古学では新しい発見などが相次いでいますが、その中での博物館の意義についてどう考えますか。

博物館の情報提供も固定的ではなく、学問の進展に即して改めていかなければなりません。研究の先端レベルを踏まえた情報を発信していく媒体という役割も、博物館に求められていると思います。

▽おかむら・みちおプロフィール

●一九四八年、新潟県生まれ。東北大学大学院修士課程修了。考古学専攻。同大学助手、東北歴史資料館館員を経て一九八七年より文化庁に入り、現職に就く。同行で史跡の指定、発掘調査、遺跡・遺物の取り扱いの指導・助言などに当たる。また文化財保護への理解を深めるため、全国各地で講演活動を行う。

●著書「日本旧石器時代史」(雄山閣)「縄文物語 海辺のムラから」(朝日百科日本の歴史)「別冊」(貝塚と骨角器)「日本の美術356至文室」(こまごまでわかった日本の先史時代)「角川書店」『石器の盛衰』歴史発掘1、「日本の歴史01巻 縄文の生活誌」(講談社)「日本列島の石器時代」(青木書店)など。

大塚・歳勝土遺跡公園開園五周年記念特別展

よみがえ

「甦る環濠集落」によせて

今から二千数百年前にはじまる弥生時代には、各地に防御施設を伴ったムラ・環濠集落が出現します。この深い濠によって囲まれた集落の形は、稲作農耕技術とともに朝鮮半島から日本列島へ伝わってきたと考えられています。福岡市比恵遺跡など比較的小形の環濠をもつ集落の事例が古くから知られていましたが、後に近畿地方の遺跡でも大型の環濠が続々と発見され、これが弥生時代に特徴的なムラの姿であることが明らかになりました。



大塚遺跡

た。また、一九八二年から開始された佐賀県吉野ヶ里遺跡の調査によって、九州地方にも大型の環濠集落が存在したことがわかり、近年の研究が大きく進展しました。

しかし、環濠集落が完全な形で発見・調査され、大地に残されたその姿を誰もがはっきりと認めることができたのは初めての遺跡は、実は現在歴史博物館の隣にある大塚遺跡だったのです。大塚遺跡からは最大延長約六〇〇メートルの環濠と、延べ一五軒におよぶ竪穴住居、一棟の掘立柱建物などが発見されました。その墓地の遺跡である歳勝土遺跡とともに、当時の横浜地域に暮らした人々の足跡を物語る重要な遺跡として注目され、一九八六年には国指定史跡となっています。当館では一九九五年に開館を記念して『弥生の「いくさ」と環濠集落』と題した特別展を開催し、大塚・歳勝土遺跡をはじめとする横浜地域の環濠集落も含めて、弥生時代の集落と社会の姿を紹介しました。また、当時の戦いに備えるムラの姿を現代に再現した大塚・歳勝土遺跡公園は、この春で開園から五周年を迎えました。



大塚遺跡出土土器

一方、現在各地で環濠集落をテーマにした史跡公園の整備が進んでいます。大阪府の池上曾根遺跡では、復元された大型の掘立柱建物を中心とした多重環濠のムラが姿をあらわしました。また、佐賀

県吉野ヶ里遺跡では遺跡公園の整備が完了し、この春正式に開園いたしました。弥生時代を代表する集落遺跡である奈良県の唐古・鍵遺跡が発見されてから約一〇〇年の歳月を経て、各地の環濠集落の姿が現代に甦りつつあるのです。

今回はこうした動きをふまえ、大阪府立弥生文化博物館を中心として、環濠集落遺跡をもつ全国の機関のご協力をいただき、佐賀県立博物館、横浜市歴史博物館を含めた三館（佐賀県の会場は佐賀県立美術館）で環濠集落展を順次開催することになりました。この展覧会では、前述の近畿地方や九州地方の代表的な遺跡を中心として、乱杭や逆茂木で防御を強化した様子がよくわかる愛知県朝日遺跡、近年調査が進み『魏志』倭人伝にみられる一支国の主要部分ではないかとも考えられている長崎県原の辻遺跡の出土資料も加え、弥生時代の環濠集落の姿を総合的に展示します。展示資料は各地か

ら出土した土器や石器、木製品のほかに、銅鐸をはじめとする弥生時代に特有の青銅器など市内・県内で出土例の少ない貴重な資料が予定されておりますので、東海・近畿地方や九州地方の大規模な弥生遺跡の姿とそこに暮らした人々の息づかいを感じていただけることでしょう。

しかしながら、今回は従来の巡回展示とは異なり、大阪・横浜・佐賀の各地域ごとにそれぞれ当地の資料や情報を加えて特色のある展示をつくりあげることにしておりますので、当館では横浜地域の遺跡群を扱った部分を掘り広げて、鶴見川流域を中心とした弥生社会の性格にせまるとともに、当地域の遺跡群が環濠集落の研究にどのような役割を果たしてきたのかということにも触れてゆくつもりです。

現在整備・公開されている大塚・歳勝土遺跡公園とあわせてご覧いただくことで、環濠集落の新たな姿が甦るのではないでしうか。七月から始まる展示にどうぞご期待ください。

◆主な展示資料（予定）

- 吉野ヶ里遺跡出土資料（佐賀県）
- 原の辻遺跡出土資料（長崎県）
- 池上曾根遺跡出土資料（大阪府）
- 唐古・鍵遺跡出土資料（奈良県）
- 朝日遺跡出土資料（愛知県）
- 大塚・歳勝土遺跡を中心とする横浜地域出土の資料

◆会期 平成一三年七月二〇日（祝）

九月二日（日）

東海道と横浜市域の宿場

— 神奈川・保土ヶ谷・戸塚 —

はじめに

今年、慶長六年（一六〇一）に近世の東海道が成立してから四〇〇周年にあたります。そのため、東海道沿いの博物館・資料館などでは関連した企画展・特別展が多数予定されています。当館でも九月から一月にかけて、東海道に関連した企画展を計画しています。ここでは東海道と横浜市域に属する三つの宿場について、簡単に紹介したいと思います。

一、神奈川宿

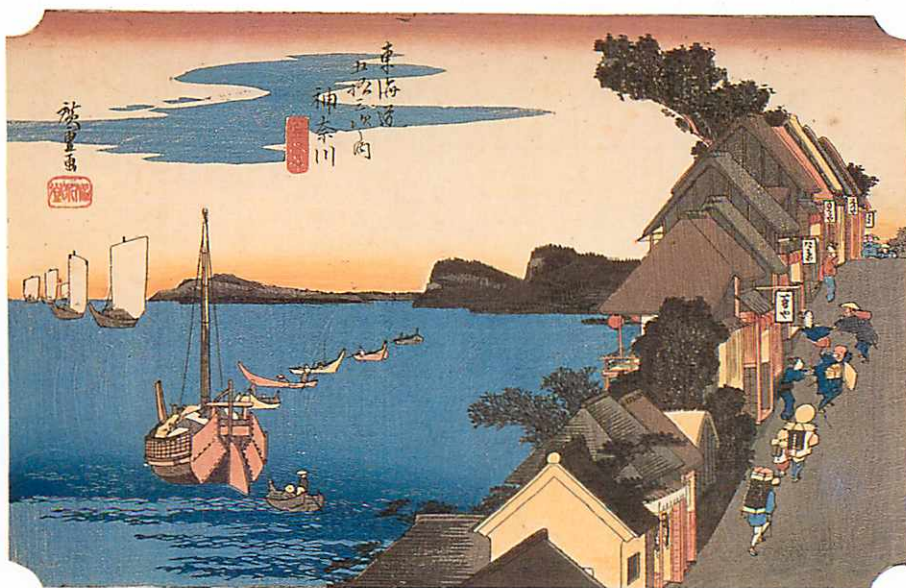
市域には東海道五十三次の内、東から神奈川宿・保土ヶ谷宿・戸塚宿といった三つの宿場が存在していました。中でも最も規模の大きかった神奈川宿（天保一四年「一八四三」の調査によれば、人口五七九三人・家数一三四一軒）は、一七世紀前半に將軍の上洛時における宿泊施設である御殿（神奈川御殿）や、それに隣接して周辺の幕府領を管轄する陣屋（神奈川陣屋）や御殿の管理を行う御殿番の屋敷がおかれています。神奈川御殿は、一七世紀後半には廃止されますが、こうした御殿の存在が、一七世紀にお

ける神奈川宿の発展に有した役割は無視できないものでしょう。また、神奈川宿には中世以来東京湾有数の湊であった神奈川湊が存在し、中世より海陸交通の要所として物資集散の地でした。慶長六年に神奈川宿が東海道の宿場になったのもこうした地域性が前提になったものと思われます。さらに横浜市の歴史において重要な転換点となった横浜の開港も当初は神奈川の開港が諸外国から要求されており、その点からも神奈川の地の重要性は再認識される必要があると思われます。

神奈川宿は、宿のほぼ中央を流れる瀧の川を境として、神奈川町と青木町から構成されています。瀧の川の東側（川崎寄り）が神奈川町、西側（保土ヶ谷寄り）が青木町です。また、両町ともさらにいくつかの町から構成されています。神奈川町は、東海道に沿って東側から並木町・新町・荒宿町と続きます。この辺りは、後述する本宿より西側へ順次町並みが伸びていったものと考えられます。さらに西へ進むと、十番町・九番町・仲之町・西之町と続き、瀧の橋にいたります。十番町以下の四か町は、本宿とも総称され、神奈川町の中でも中心的な存在であ

り、宿場の最重要施設である神奈川町の本陣（石井本陣）は西之町に、問屋場は九番町にそれぞれおかれています。また、東海道とほぼ平行している道が二本存在し、その内、海側にある道沿いには、獵師町（漁師町）・小伝馬町が存在していました。一方、東海道よりも丘陵側にある道沿いには御殿町があります。この他、東海道とほぼ直角に交差している道が二本あります。十番町の辺りで丘陵側へ伸びている道沿いには仲木戸横町が、西之町と仲之町の境から北へ伸びている道沿いには飯田町・二ツ谷町が、それぞれ存在していました。

青木町は、瀧の橋から東海道を西へゆくと、瀧之町となり、ここに青木町本陣（鈴木本陣）がおかれています。そこから西へ進むと、久保町・元町・七間町（七軒町）と続き、その西側には房総半島までを望む景勝地として



広重 東海道五拾三次之内 神奈川（保永堂版）

有名な台町にいたります。江戸から京都へ向かっていくと登り坂になる台町の東

側は東台、下り坂になる西側は西台と称されています。西台を下りきった辺りに神奈川宿の京都側の入口である上方見付がありました。そこから西へ行き、軽井沢（青木町の枝郷）を過ぎると、芝生村

に入ります。

二、保土ヶ谷宿

芝生村から東海道を西へ行くと、保土ヶ谷宿にいたります。神奈川宿と保土ヶ

谷宿との距離は、

一里九町（約五キ

ロメートル）とき

わめて短いのが特

徴ですが、その理

由についてはよく

わかっていません

ん。天保一四年の

調査によれば、保

土ヶ谷宿の人口は

二九二八人・家数

五五八軒で、お

よそ神奈川宿の半

分といった規模の

宿場でした。同宿

は保土ヶ谷町・岩

間町・帷子町・神

戸町という四つの

町から構成されて

いますが、それぞ

れの町の範囲は複

雑に入り組んでお

り、神奈川宿の青

木町と神奈川町の

ように整然と区分

することはできま

せん。宿場全体の

構造はほぼL字形

広重 東海道五拾三次之内 保土ヶ谷（保永堂版）

帷子橋をわたって直進し、軽部本陣の地点でほぼ直角に右側に屈折しています。ただし、同宿は一七世紀の半ば頃に、宿場の移転と東海道のルートの変更が行われていますので、前述したような宿場の形はそれ以降のものと思われます。また、保土ヶ谷宿は東海道と、金沢八景として有名な景勝地である金沢へ向かう金沢道の分岐点でもありました。

三、戸塚宿

保土ヶ谷宿を出ると、武蔵国と相模国

の国境である境木の立場をへて、戸塚

町・吉田町・矢部町の三つの町から構成

されている戸塚宿へいたります。同宿の

宿場としての正式な成立は、神奈川宿・

保土ヶ谷宿より若干遅れ、慶長九年（一

六〇四）です。これは保土ヶ谷宿と藤沢

宿の距離が長く人馬の往来が難儀なた

め、途中の戸塚に宿場を設定したことに

よります。ちなみに保土ヶ谷宿から戸塚

宿までは二里九町（約九キロメートル）

です。天保一四年の調査によれば、戸塚

宿の人口は二九〇六人・家数六一三軒

で、ほぼ保土ヶ谷宿と同規模の宿場です。

江戸日本橋から戸塚宿までの距離は、一

〇里一八町（約四二キロメートル）で、

当時の健康な男子の一日の歩行距離と思

われる一〇里にほぼ等しいことから、日

本橋を早朝出立した旅人の最初の宿泊地

は戸塚宿でした。また、同宿は、東海道

と大山道・鎌倉道との分岐点でもありま

した。大山道は雨乞の神として名高い大

山阿夫利神社へ、鎌倉道は多くの由緒あ

る寺社が存在する鎌倉へとそれぞれ向かうものです。

おわりに

東海道はさらに西へ続き、参勤交代の大名行列や、伊勢神宮などの西国の有名な寺社へ参詣する人々など多種多様な目的のために、多くの人々や物資が往来していました。いわば江戸時代の日本列島の政治・経済・文化を支える物流・情報の大動脈として東海道は機能しており、市域の三つの宿場を初めとする「東海道五十三次」の宿場は、地域の政治・経済・文化の中核として存在していたのです。

（斉藤 司）



広重 東海道五拾三次之内 戸塚（保永堂版）

養蚕図屏風

養蚕は、明治初期から昭和初期にかけては横浜地域でも盛んに行われていました。市域では、蚕のことをオコサマ（御蚕様）と呼んでいました。これは蚕がもたらす経済力が自分たちの生活を支えてくれていたことから、敬意を込めて呼んだためと思われます。

この屏風は、養蚕から織布までの一連の工程を描いたものです。右隻は、主に養蚕の工程で、右から種紙の確認、種紙

の水浸け、稚蚕飼育用の桑切り、掃き立て、飼育、桑摘み、桑の運び入れ、繭作り、そして収繭するまでを描いています。左隻は主に織布の工程で、繭を運び入れるところから始まり、糸取り、製糸、織布、そして織り上がった絹布の等級定めまでを描いています。

屏風は、作者や年代などの銘が入っていないために具体的なことはわかりません。画面に描かれていることだけを手がかりとする



右隻



左隻

と、蚕がさなぎを作る際に使われるマブシという道具がワラで作られた素朴なものであることや、人々の風俗や風景などから、江戸時代後期から明治初期にかけてのものではないかと推測されます。

このように、ある生業の始まりから終わりまでを描いた屏風や絵巻としては「四季耕作図」が知られていますが、この資料はその養蚕版ということができそうです。「四季耕作図」の場合は農業、特に稲作の始まりから終わりまでを題材に描いたもので、中国で描かれた「耕織図」や江戸時代に数多く出版された農書などを手本として描いてある場合がほとんどです。養蚕図についても一般には「四季耕作図」と同様な傾向を示すようですが、この資料では「養蚕秘録」など、農書の挿し絵をそのまま手本として写したような構図は見あたりません。生き生きとした表情で描かれた養蚕や織布に従事する人々の姿を見ていると、作者はこのような手本を参考にしながらも、自分のオリジナリティを加味しようとして描いたようにも思われます。養蚕の工程が細かく具体的に描かれているのに対し、織布の工程のうち糸取りの様子や織布の際の機への糸の掛け方が不明瞭に描かれているのは、作者の養蚕に対する知識と織布に対する知識の差がそのまま画面に表現されたのだともいえるでしょう。

この資料は、残念ながら横浜地域の養蚕を描いたものではなさそうですが、当時の養蚕や織布の様子を私たちにうかがわせてくれる貴重な資料ということがができます。

表紙には、右隻のうち蚕飼育用の桑切りと掃き立ての場面を拡大して掲載してありますので、あわせてご覧下さい。

常設展示室探検

桜屋

近世の常設展示室に入ると大きな建物の模型が目に入ります。この模型は江戸時代神奈川宿の台町にあった茶屋「桜屋」を二〇分の一で復元したものです。

当時台町からの海の眺望は有名で、この眺望を売りに多くの茶屋が建っていました。桜屋はその中でも特に知られた茶屋で、広重や豊国などの浮世絵、「江戸名所図会」や「金川砂子」など



の地誌にその姿が描かれています。

桜屋に関しては設計図はもちろん、間取り図も残っていないので、主に「江戸名所図会」の絵をもとに、建物や内外に配置された人形を製作しました。

模型は昼から夜にかけての桜屋周辺の時間的推移を照明と音響の演出で表現しています。あなたも一〇分の一サイズの人になって、各部屋の奥をのぞき込み、また建物を廻りながら、神奈川世界にタイムスリップしてみてください。



情報機器室

常設展示室の映像コーナーとスタジオサロンには、各区の歴史を紹介する一八区史や博物館で自主制作した歴史関係のビデオなど、横浜地域の歴史や文化財に関する約二五〇本ものビデオを見ることができます。皆さんは、ブースに座ってこの中から見たいビデオ番組をタッチパネル



情報機器室の内部

左は番組やロボットを制御するコンピューターです。右に見えるのは光ディスクに番組を記録するための編集機器です。



ロボットと光ディスク

右側の棚に並んでいるのが光ディスクです。ロボットはこの中から指示された番組の入った光ディスクを選び、左側の再生装置に運びます。

やトラックボールを使って選ぶだけで自動的に番組を見ることが出来ます。

今回は、皆さんの選んだ番組がいったいどうやってビデオブースに送られるようになっていくのか、このビデオコーナーを動かしている舞台裏についてお話しします。

ビデオコーナーを動かす機械は、情報機器室という部屋に納められています。ここにあるのは、ビデオの編集機器とコンピューター、そしてロボットです。ロボットといっても、テレビにでてるような人間の形をしたものではなく、大きな箱形の機械です。

ロボットの中にはこの光ディスクが二五〇枚入るようになっていきます。光ディスクとはビデオ番組を最大三〇分記録できるディスクで、一枚のディスクに二、三分くらいの短い番組なら一〇番組、二〇、三〇分ほどの場合は一番組が記録されています。光ディスクはレーザー光線で音と映像を読みとるので、ビデオテープのよう

に延びて画質が劣化したり、ビデオデッキからまったりすつたりするトラブルはありません。テープと

違ってすぐに番組の頭出しができるので、一枚のディスクに複数の番組を記録しておいてもすぐに再生が可能となっています。ビデオ番組を光ディスクに記録するために、ビデオの編集機器も備えられています。

コンピューターは、六台のビデオブースから信号を受けると、みなさんが選んだ番組がどの光ディスクに入っているかを判断し、ロボットに指示を出します。ロボットは指示されたディスクをつかみだし、再生装置に運んで挿入します。さらにコンピューターは、ディスクに記録されている番組の中からどれを再生するか、そして映像をどのブースに送るかを再生装置に指示します。こうして、みなさんがいるブースに映像が送られて、番組が始まる仕組みとなっています。

もしも六台のブースが満員になると、コンピューターとロボットは大忙し。順番に番組が入っているディスクを選んで次々に再生装置に運んだり、見終わったディスクを再生装置から抜き出して元の棚に戻したり、休む間もなく行ったり来たりを繰り返しています。

情報機器室では、皆さんが番組を選んでから映像が始まるまでのわずかな時間に、コンピューターとロボットがこれだけの仕事をこなしているのです。



映像コーナーの初期画面

ちよいと

ミュージアムショップたいむ Museum Shop Time

D 埴輪ドッグ
250円 (税別)



C ミニチュア埴輪
500円～ (税別)



B 埴輪てぬぐい
800円 (税別)



A 埴輪ぬいぐるみ
500円 (税別)



1月27日から5月6日まで、ミュージアムショップでは、企画展「古墳からのメッセージ」に関連したグッズを販売しています。さて、ここで問題です。次の4つのうち、実際には販売していないグッズはどれでしょうか。

正解は店頭でお確かめください。

INFORMATION

今後の企画展のお知らせ

- ◇特別展 古墳からのメッセージⅡ 大古墳展・ヤマト王権と古墳の鏡
3月31日(土)～5月6日(日)
奈良県黒塚古墳、京都府椿井大塚山古墳出土の三角縁神獣鏡あわせて60面あまりが初めて一堂に集まるほか、装飾品、さまざまな埴輪、石製品、須恵器など、近畿地方の代表的な古墳出土の品々を紹介します。
- ◇大塚・歳勝土遺跡公園開園5周年記念特別展 甕の環濠集落(仮題)
7月20日(金・祝)～9月2日(日)
大塚・歳勝土遺跡公園の開園5周年を記念して横浜市域の弥生時代をふりかえるとともに、大型の環濠集落として著名な大阪府池上曽根遺跡、奈良県唐古・鍵遺跡、佐賀県古野ヶ里遺跡などの資料を多数展示し、当時の社会や技術を広く紹介します。
- ◇企画展 東海道と保土ヶ谷宿(仮題)
前期9月22日(土)～10月14日(日)
後期10月27日(土)～11月25日(日)
今年は、東海道の成立400周年にあたります。そこで、当館で収集した東海道を対象とした屏風・絵巻や、保土ヶ谷宿を題材とした浮世絵などを展示します。

???????知ってますか???????

インターネットホームページ

博物館ではホームページを開いています。内容は博物館施設や野外施設の案内、特別展・企画展や体験学習・講座・歴史探検等の催し物案内などの基本的な情報に加え、ミュージアムショップや市民の方が利用できる館内施設(講堂・研修室等)の案内、野外施設を案内する解説ガイドの紹介など、より身近な情報も提供しています。

個々の情報はさらに詳しくなり、たとえばミュージアムショップに関しては、販売グッズとその購入方法、購入可能な図録や研究紀要・調査報告書など刊行物の情報を知ることができます。ページを見て興味のある方は是非お求めください。

さらに昨年からは、ホームページで博物館内の主な収蔵資料や全ての図書文献資料、そして市域にある国・県・市の指定文化財のデータベースを検索できるようになりました。この検索サービスにより、たとえば自宅から博物館の図書類を調べることが可能になりました。館のホームページは横浜市のものなどいくつかのページとリンクしていますので、みなさんも一度アクセスしてみてください。

<http://www.rekihaku.city.yokohama.jp>



(2000年12月1日～2001年3月31日)

- 12月9・10日 体験学習「風づくり」
- 12月26・27日 全館燻蒸のため臨時休館
- 1月24日 歴史講座「古代史講読講座」(2月21日まで連続5回)
- 1月27日 企画展「古墳からのメッセージⅠ 横浜の古墳と副葬品」開催
- 1月27・28日 体験学習「紙すき」
- 2月4日 開館6周年記念特別講演会 吉田章一郎「陶磁の歴史-窯址の発掘からみる-」
- 2月18日 企画展関連講演会 池上悟「横浜地域における横穴墓の展開」
- 2月18日 歴史講座「土器作り教室」(3月25日まで計4回)
- 3月2日 企画展関連「横浜古墳めぐり」
- 3月11日 企画展関連講演会 白石太一郎「古墳からみた畿内と東国」
- 3月17・18日 センター北まつり参加
- 3月22日 <ふるさと横浜探検5>国指定史跡小田原城址と石垣山一夜城址の探訪
- 3月31日 特別展「古墳からのメッセージⅡ ヤマト王権と古墳の鏡」開催(5月6日まで)

横浜市歴史博物館●日誌●

横浜市歴史博物館ニュース読者プレゼント



いつも博物館ニュースをお読みいただきありがとうございます。感想等をぜひお寄せ下さい。お寄せ下さった方にプレゼントをさしあげます。

はがきに、①お名前②ご住所③年齢④このニュースを手にした場所⑤ニュースについての感想・要望をお書きのうえ、博物館読者プレゼント係までお送り下さい(博物館の住所はこのページの右下)。ご応募いただいた方の中から抽選で10名様に、博物館ミュージアムショップよりオリジナルグッズをさしあげます。おはがきお待ちしております。

横浜市歴史博物館および大塚・歳勝土遺跡公園の利用案内

●開館時間

午前9時から午後5時まで(ただし、入館は午後4時30分まで)

大塚遺跡、都筑民家園を除く公園部分は24時間オープン

●休館日

月曜日、祝日の翌日、年末年始

そのほか展示替えなどのため、臨時に休館することがあります。

●常設展観覧料

区分	個人	団体 (20人以上1人につき)
一般	400円	320円
高校生・大学生	200円	160円
小学生・中学生	100円	80円

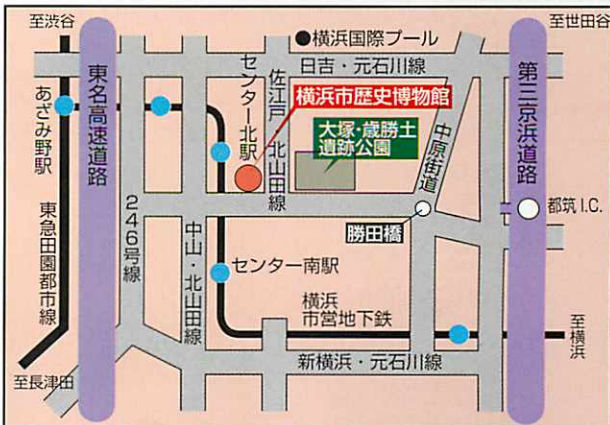
◆特別展・企画展の観覧料は、別に定めます。

◆第2・第4土曜日は、小・中・高校生は無料です。

◆「長寿のしおり」「敬老特別乗車証」「愛の手帳(療育手帳)」「身体障害者手帳」「障害者手帳」をお持ちの方は無料です。

●交通案内図

横浜市営地下鉄「センター北駅」下車徒歩5分
(「センター北駅」へは横浜駅から23分 新横浜駅から12分)



駐車場あり(2時間400円)

●インターネットホームページ

<http://www.rekihaku.city.yokohama.jp/>

編集後記

博物館ニュース12号をお届けします。ようやく暖かくなってきました。博物館の春は、特別展「ヤマト王権と古墳の鏡」が始まります。近畿から古墳時代の一級資料が横浜にやってきました。ぜひお出かけ下さい。博物館ニュース読者プレゼントにもぜひご応募下さい。

